様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ１３０１２

研究課題名（和文）15世紀北イタリア宮廷におけるヘラクレス図像の受容の様相

研究課題名（英文）Fifteenth Century Images of Hercules in Northern Italian Courts

研究代表者
小松原　郁（Komatsubara, Aya）

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：２０８０３１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、15世紀北イタリアの諸宮廷におけるヘラクレスのイメージ形成と伝播の様相を明らかにすることを目的とし、フェッラーラ、マントヴァ、リミニ、パヴィアで制作された作品及び北イタリアの諸君主同様傭兵隊長を務めたベルガモのコッレール家の墓廟礼拝堂におけるヘラクレス図像の分析を行った。分析においては特に、これらの図像に先立って14世紀にアンジュー家統治下で制作された、ナポリ宮廷の作品群との関連と、君主の顕彰図像における家系の記憶の形成という観点から図像を再考し、北イタリアの図像の特徴と位置づけを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヘラクレスは古代から人気を博した英雄であり、ローマ皇帝の擬装彫像から戦後のアクション映画のヒーローに至るまで、様々な場面で理想の男性像がそこに投影されてきた。本研究では、神話表現の機会が飛躍的に広がった15世紀の北イタリア美術に焦点を当て、詳しく検証したことで、図像の揺籃期におけるイメージ形成と伝播の様相が明らかとなり、ルネサンス以降の図像の意図や機能もより明瞭になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies aspects of the formation and diffusion of images of Hercules in Northern Italian courts during the fifteenth century. Firstly, we investigated the images in the residences, mausoleums and tombs of several ruling families, paying particular attention to representations of family history. Secondly, we analyzed the relationship between the images made in the 14th century Naples and 15th century Northern Italy to determine their differences. Based on the investigation in Italy and analysis of the associated images, this study highlighted the characteristics of the iconography of Hercules in Northern Italy.

研究分野：西洋美術史

キーワード：北イタリア　ルネサンス　宮廷美術

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ヘラクレスは古代から人気を博した半神半人の英雄であり、異教神話の主題を造形化することがとりわけ避けられてきた中世においても、限定的な形ではあるがキリスト教美術の中に表され続けた稀有な存在である。イタリアでは、ローマ皇帝の擬装彫像から戦後のアクション映画のヒーローに至るまで、様々な場面で理想の男性像がそこに投影されてきた。また、そのイコノグラフィーに焦点を当てた展覧会も繰り返し開催されている（『創建者ヘラクレス』Ercole il fondatore, 2011 年、ブレシア、サンタ・ジュリア博物館など）。

中世からルネサンス期にイタリアで制作されたヘラクレスの図像については、パノフスキーが「分離の法則」の一例として、ピサの説教壇やヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂ファサード装飾のヘラクレスの図像を、キリスト教の剛毅や美徳の象徴として解釈し論じたことを皮切りに多くの解釈がなされてきたが、これまでの研究では、中部イタリアの図像の分析が中心であった。ペトロッキ(“Il mito di Ercole dal tardo-antico al Rinascimento” in A.Cavallaro (ed.) Temi profani e allegorie nell’Italia centrale del Quattrocento, Roma, 1995, pp. 81-97)は古代末期からルネサンスにおけるヘラクレス図像の受容について、主として人文主義的テクストとの関連から分析しているが、主眼が置かれているのはパノフスキーらによって取り上げられてきたトスカーナやヴェネツィアの作品であり、そこにローマや北イタリアの一部の作品の分析を加えたものとなっている。また、エトリンガーは、共和制の守護者として尊ばれたヘラクレス図像を、メディチ家が自身の顕彰図像に巧みに利用してきたことを明らかにしている。(“Hercules Florentinus”, in Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz, XVI, 1972, pp. 119-142)

その一方で、君主制の諸都市におけるヘラクレス図像の位置づけについては部分的な言及に留まっている。申請者は研究開始の時点において、マントヴァの宮廷画家マンテーニャが制作した《夫婦の間》におけるヘラクレス図像に着目し、フィレンツェのメディチ家におけるヘラクレス像からの影響を指摘していた（マンテーニャ作《夫婦の間》再解釈: 壁画構想におけるメディチ家からの影響」小松原郁『美術史』美術史学会、第 179 冊, pp. 49-61, 2015）。しかしこれまでの研究では、北イタリアのヘラクレス図像の一部の分析に限定して論じているため、本研究において、北イタリア諸宮廷における作例を幅広く考察し、ヘラクレス図像の受容の様相と意味を明らかにすることを課題とするに至った。

２．研究の目的

本研究では、神話表現の機会が飛躍的に広がった 15 世紀に焦点を当て、北イタリアの諸宮廷におけるヘラクレスのイメージ形成と伝播の様相を明らかにすることに主眼をおいた。この期間の作例は、ルネサンス以降の図像体系を育んだ先駆的作品として重要であるためである。

分析の際には、とりわけ以下の観点からのアプローチを試みることとした。

（１）関連する図像を幅広く収集し造形表現の特質を分析するとともに、その構想の社会的背景を精査し、現存する作品の図像コンセプトや都市間の影響関係を考察することで、北イタリアのヘラクレス図像の特徴とその形成過程を明らかにする。

（２）ヘラクレス図像の機能を、家系の記憶の形成という観点から明らかにする。

宮廷における室内装飾は君主の私的な空間でありながら外部に対して自己のイメージを提示する重要な場であり、一方墓廟や墓碑は記憶の共有の場という世俗的機能と、葬礼儀式の場としての宗教的機能という二面性を持ち、世俗権力の顕彰図像とキリスト教の伝統的図像とが融合しながらさまざまな図像を生み出してきた。そのためヘラクレスの図像を場との関係から統一的に捉え直し、家系の記憶の形成という観点から北イタリアの君主の顕彰図像を考察することで、北イタリア宮廷の図像の独自性と位置づけをより明確にすることを目指した。

３．研究の方法

研究目的を達成するため、以下の方法を取った。

まず、宮廷装飾および墓碑、墓廟におけるヘラクレス図像の実地調査を通して、残存する図像の様式および内容を確認した。北イタリアにおいては、ヘラクレスを主題とした世俗装飾の貴重な残存例であるフェッラーラのパラッツォ・パラディーゾ内ヘラクレスの間の装飾と、君主ではないが他の北イタリア君主同様傭兵隊長を務めたコッレール家によって注文されたベルガモの墓廟礼拝堂装飾に着目し、図像調査を行った。

さらに、それらの図像構想における都市間の影響関係を明らかにするために、各都市の政治的関係を調査しながら、北イタリア内の諸作品と、14 世紀ナポリにおける作例、共和制のフィレンツェやヴェネツィアの作例との比較を行った。比較分析においては、特に次のような観点から考察し北イタリアのヘラクレス図像の特徴を明らかにすることを試みた。

・ナポリにおける君主の顕彰図像との関連

北イタリアの例に一世紀先立つ、14 世紀ナポリ宮廷におけるヘラクレス図像に着目し、15 世紀の宮廷美術におけるヘラクレス表現を解釈するための手がかりとした。アンジュー家統治下においてはさまざまな形でヘラクレスが表されており、その図像表現も多岐にわたるが、詳細に分析されておらず、北イタリアの作例との関連も考察されていないためである。

具体的には、プラート市がロベール・ダンジューに献呈した写本『王の頌詩』(所蔵：大英博物館他)や、ロベールの孫娘ジョヴァンナのために制作されたと考えられる『アンジューの聖書』、

また宮廷の室内装飾などロベールの宮廷およびその周辺で制作された作品内におけるヘラクレス図像を精査し、それらの造形表現の特質や図像的意味を明らかにした上で、北イタリアの図像を再解釈した。
・美徳/力 virtù と運命 fortuna との関連からのヘラクレス図像の分析
　ルネサンスの人文主義的テクストとヘラクレス図像との関連においては、ボッカッチョによる『諸神系譜』やコルッチョ・サルターティによる『ヘラクレスの功業』における道徳的模範としてのヘラクレスの描写とヘラクレス図像との関連が指摘されてきた。申請者は、美徳/力と運命の拮抗というテーマと、世俗の力の象徴であるヘラクレスと運命の寓意像の図像とのアナロジーについて分析し、運命に打ち勝つ力としてヘラクレス図像が位置づけられていることを明らかにすることを試みた。
・冥府下りのテーマとの関連からのヘラクレス図像の分析
　リミニやマントヴァにおいて、冥府下りのテーマが、君主を顕彰するテクストや図像に利用されていることに着目し、ヘラクレスの功業における冥府下りの主題とアエネアス、オルフェウスやキリストの冥府下りとのアナロジーから図像の意味について分析を行った。具体的には、リミニの宮廷で制作されたシジスモンド・マラテスタの冥府下りとスキピオ、アエネアスの冥府下りのアナロジーの図像や、マントヴァの宮廷画家マンテーニャによって制作された《リンボのキリスト》におけるキリストの冥府下りの図像とヘラクレス図像との関連について分析し、図像の意味を解釈した。

４．研究成果
　研究の初年度である 2019 年度には、北イタリアおよび中部イタリア各地の室内装飾および墓碑、墓廟におけるヘラクレス図像の調査および資料収集を行い、その分析を進めた。
　まず、11 月 11 日～23 日にかけて、イタリアにて実地調査と資料収集を行った。特に、ヘラクレスを主題とした世俗装飾の貴重な残存例であるフェッラーラのパラッツォ・パラディーゾ内ヘラクレスの間の装飾、墓廟の装飾図像においてヘラクレスが重要な役割を果たしているベルガモのコッレール家礼拝堂の図像調査を集中的に行い、また、比較対象としてフィレンツェのポルタ・デッラ・マンドルラの浮彫や、ローマのパラッツォ・ヴェネツィア内《ヘラクレスの間》などのヘラクレス図像の調査を行った。フィレンツェにおいてはまた、マックス・プランク美術史研究所図書館にて専門的な文献資料の収集を行った。
　図像の分析を進めていく上で、当初美徳/力 virtù の寓意像との関連を分析する予定であった部分については資料が不足したことから、ミラノ及びナポリにおける《著名人列伝》の壁画のヘラクレス図像（現在消失）を考察対象に加え、分析する形に修正した。まず、現在では失われてしまったミラノ及びナポリの《著名人列伝》の壁画プログラムの、当時の状態の再構築と図像の意味内容の解釈に向けて、類似主題の現存作例の実地調査を行った。具体的には、サルッツォのマンタ城内の《九賢人》の壁画およびフォリーニョのパラッツォ・トリンチ内の《九賢人》及び《著名人たち》壁画を実見し、壁画の図像構成、作品の様式及び銘文についての調査を行った。それによって、君主の鑑としての位置づけと美徳の寓意としてのイメージ、さらに騎士道の英雄としてのイメージとの複雑な混交状況を明らかにすることができた。
　その研究経過については、「15 世紀北イタリア宮廷美術におけるヘラクレス神話受容についての一考察」として 12 月 14 日に開催されたルネサンス研究会において口頭発表を行った。
　2020 年度には、2019 年度に収集した図像の分析と文献資料の精読を進めた。15 世紀に制作されたセネカの『悲劇集』写本内の「狂えるヘラクレス」「オエタ山上のヘラクレス」の挿絵および『トロイア物語』などの歴史物語におけるヘラクレスの描写の分析、および冥府下りのテーマとの関連からのヘラクレス図像の分析を行った。また、個々の事例のより詳しい影響関係や政治的背景、ナポリで制作された作品群からの北イタリア宮廷の家系の顕彰図像への影響関係を精査した。
　文献資料の再検討や実地調査に基づいた図像の分析からは、以下のことが明らかとなった。
・14 世紀ナポリ宮廷およびその周辺において制作された作品の図像表現の多様性と以下のような特徴が明らかとなり、15 世紀の北イタリア宮廷において制作された図像の重要な源泉として位置づけ、作品解釈の手がかりとした。
　ナポリ宮廷においては、例えば『アンジューの聖書』ではヘラクレスが系譜に関連するテクスト部分の挿図として描かれていることから象徴的祖先として視覚化された早期の例と位置づけられる。また、『アンジューの聖書』では君主の美徳のひとつとしての「剛毅」の擬人像、プラート市から献呈された『王の頌詞』では教皇派の筆頭としての統治者の美徳や力の象徴として裸体のヘラクレスが表現されている。一方で、《著名人たち》（現存せず）の壁画内では、銘文を伴い九賢人の主題に類する教訓的模範として表されていたと考えられる。
　物語の写本挿絵については特に、『古代からカエサルまでの歴史物語』において中世風の衣服で表現されている他に、セネカの悲劇集写本（所蔵）において、「狂えるヘラクレス」挿図に表されるが、セネカ写本ではヘラクレスの物語にのみ詳細な描写が加えられており、宮廷内での関心の高さが確認された。
・15 世紀北イタリアの宮廷におけるヘラクレス図像については、以下の二つの類型に大別しその特徴を明らかにした。
（1）マントヴァ、リミニ、パヴィア、ベルガモ

アンドレア・マンテーニャが制作したマントヴァ侯爵ルドヴィーコ・ゴンザーガの居城内装飾《夫婦の間》では非業の死を遂げるオルフェウスとの対置により、運命に打ち勝つ力や統治者の美徳の象徴としてヘラクレス神話が強調されている。リミニのシジスモンド・マラテスタが発注し、アゴスティーノ・ディ・ドッチョが制作した《祖先の墓》（1454 頃）では、スキピオの冥府下りと関連づけて解釈される《ミネルヴァの神殿》においてヘラクレスの姿が確認され、統治者の力を暗示するとともに君主の象徴的祖先として位置づけられていると考えられる。これらの例ではナポリの例よりも冥府下りの関連が強調されている。また、他の神話主題との関連付けによって、より複雑な図像体系に組み込まれていることが確認された。

また、パヴィアのスフォルツァ家墓廟であるチェルトーザ・ディ・パヴィア修道院聖堂の正面浮彫や、傭兵隊長であるベルガモのコッレール家の礼拝堂では、蛇を絞め殺す幼児ヘラクレスやアンタイオスとの戦いの場面が表され、原罪にたいする贖いとして位置づけられるとともに、自らの血統の正統性や武勲の象徴として挿入されていると考えられる。

（2）フェッラーラ

フェッラーラの作品については、ニッコロ三世の注文であると考えられるパラッツォ・パラディーゾの《ヘラクレスの間》およびピエル・アンドレア・バッシが同侯のために著した『ヘラクレスの功業』（1430 年代以降）と後に制作された写本挿絵、またリオネッロ・デステのためのタペストリーのヘラクレスの連作の分析を行い、フェッラーラではフランスにおけるヘラクレスの描写とイタリアにおける人文主義的なテクストや古代への趣味が特に混交して現れていることを確認した。

以上のように、ルネサンス期北イタリアの宮廷でのヘラクレス図像の形成と伝播の様相を分析し、図像の都市間の影響関係や、北イタリアに特有の図像プログラムの特徴を明らかにした。

これらの成果については共著『カルチャー・ミックス III―「文化交換」の美学的展開編―』（清瀬みさを編、晃洋書房、2020）にて「ルネサンス期宮廷美術におけるヘラクレス図像の様相」として刊行された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小松原郁
２．発表標題 15世紀北イタリア宮廷美術におけるヘラクレス神話受容についての一考察
３．学会等名 ルネサンス研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 清瀬　みさを	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 258
３．書名 カルチャー・ミックスIII	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関